映画館今昔

「四日市映画館　総まとめ」

太田義幸　通りすがりの映画好き

私は、このシネマ游人で過去４回(２、４、６、７号)、映画館について投稿した。もうそろそろ一つの映画館だけでの話題では原稿を埋められないので、総まとめとして四日市の映画館についてそれぞれ記そうと思う。と言っても私が映画を観始めたのは、だいたい昭和50年代以降なので、それ以前の映画館については、大先輩のかたがたに語っていただく日があろうということでご容赦いただきたい。

それでは、それぞれの映画館の思い出を綴ろうではないか。

○四日市シネマ・グランド(昭和32年9月23日開館・昭和59年7月25日閉館)

現在の近鉄百貨店の東側にあるスターアイランド(このスターアイランドも令和２年２月末で閉店とのこと)の場所にあった映画館。シネマとグランドと２館が並んでおり、あまり区別はついていなかったが、どうもシネマは洋画で、グランドは邦画を主に上映していたらしい。小学生時代のうれし懐かしの「まんがまつり」なんかの際に親に連れて行ってもらったと記憶している。

ここは映画館の記憶よりも、隣接してタイ焼き屋があったのだが、毎日毎日１年３６５日、下門真人の「およげ！たいやきくん」を流しっぱなしにしていたのが強烈に記憶に残っている。あの「毎日、毎日、僕らは鉄板の上で焼かれて、嫌になっちゃうよ～」と言う会社勤めのサラリーマンの悲哀に通じる歌詞で大ヒットした「およげ！たいやきくん」である。いつシネマ・グランドに行っても、いつ通っても必ずエンドレスであの歌が流れていた。いくら何でも一日中あの歌を聴きながらタイ焼きをつくっていたお店の人は、気が変にならないのだろうかと子どもながらに心配になったものである。

○宝塚劇場(昭和61年8月31日閉館)
四日市市役所から少し北に立地していた。現在は駐車場か。一般映画を上映していたと思っていたらいきなり洋ピンを上映するというトリッキーなスケジュールを組む映画館であった。
中学生の時にチャップリンのドキュメント映画『放浪紳士チャーリー』を上映していたのだが、その上映期間中にチャップリンが逝去。なぜか男女4人で観に行くことになっていたが、チャップリン逝去の報に観客がつめかけると勝手に想像した私が「混雑して座れなくなるといけないから早めに行こう」と声をかけて行ったらほとんど観客はおらず、女子とともに近日上映の洋ピンのポスターの前で1時間ほど開館を待っていたというお茶目な記憶がある。

○三重劇場(昭和21年2月18日開館・昭和62年6月7日閉館)
湯の山街道沿いにあり、大正館の北側に立地していた。今はコインパーキング。宝塚劇場の姉妹館。大作洋画を上映していた記憶がある。確か建物正面にも何かの意匠が施されていたし、映写室の横の2階にも客席があるといったおしゃれな映画館であった。
つい先日、『スター・ウォーズ　スカイウォーカーの夜明け』をイオンシネマ桑名で観たが、確か『スター・ウォーズ』第1作はここで観たような。あの一大サーガ全てを映画館で観られたことはやはり感慨深いものがあるなぁ。

○四日市にっかつ劇場(昭和22年開館・昭和56年11月閉館)
宝塚劇場の東隣に立地していた。昔は石原裕次郎や小林旭主演の映画を上映していたそうだが、私が映画を観るようになった中学生のころは、既にロマンポルノ路線に切り替わっており入場する機会はないだろう。
と思っていたら、日活が制作した『高校大パニック』という映画が一般映画として四日市にっかつ劇場で上映するというではないか。一般映画とはいえ日活で上映するのだから当然にムフフな場面が映し出されるに違いないと思ったのか中学生仲間と観に行ったのだ。内容は博多の名門高校を舞台に受験のストレスを抱えた高校生がライフルを高校で乱射するというもの。映画のキャッチコピーが「数学できんが、なんで悪いとや！」。こう叫んでライフルを発砲しまくっていた。はい、数学ができなくても何も悪くないですよ。ちなみにムフフな場面はなかったと思う。

同時上映は『帰らざる日々』。なんとシネマ游人でもおなじみの四日市出身の藤田敏八監督の作品だ。そういえば『最高の人生の見つけ方』の番宣でテレビに出ていた吉永小百合が、「昔は、助監督の藤田敏八さんたちとよく飲みに行ってましたよ。」とテレビで言っていた。藤田監督の名前が吉永小百合の口から出たのは嬉しかったなぁ。

○富田劇場

ＪＲ富田駅の近くにあった映画館。嬉し恥ずかし思い出の映画館。詳しくはシネマ游人第７号「四日市に富田劇場があった。一回だけ行った」をお読みくださいませ。

○塩浜劇場

塩浜駅の東側にあった映画館。はい、ここはピンク映画館。シネマ游人第７号「四日市に富田劇場があった。一回だけ行った」から以下、抜粋である。

中映でバイトをしていた関係で、中映系列の劇場であった塩浜劇場(ここもピンク映画館)のタダ券をもらったので、とりあえず行ったことがある。その時は成人になっていたので堂々たる入場だ。観ていると劇場の人が入ってきてアナウンスした。

「○○高校の△△さん、お友達が呼んでいるのでロビーまで来てください」

○弥生館

国道一号と湯の山街道の交差点に立地。階段を上がらないと入場できないという、いま思うと足の不自由な人には優しくない構造だったなぁ。

彼女のいないクリスマス・イヴの日に、早く帰るのも何か嫌で映画を観て時間をつぶそうと思い、かと言ってカップルが喜んで来るような映画は観たくなく、チョイスした映画は『桂三枝のゴルフ夜明け前』。カップルはいなかった。だけでなく観客は私一人だったという素敵なイヴの時間を過ごしたのは弥生館２だったなぁ。

○スカラ座(平成９年２月28日閉館)

弥生館と同じ建物。不朽の名作『ゴッド・ファーザーⅠ・Ⅱ』の続編である『ゴッド・ファーザーⅢ』が上映されたのがスカラ座。お行儀よく観ていたら、いかにもその筋の人と思わしき人物が「何やこれは！、さっぱり分らんわ！」と席を立って出て行った。うーん、『仁義なき戦い』とかのドンパチが繰り広げられると思って入場料を払ったんだね。

残念だったね。

○四日市シネマホール「ベガ・スピカ・リゲル」(昭和59年8月1日開館・平成16年6月6日閉館)

四日市シネマ・グランドの場所にスターアイランドが建つために、近鉄興行が今のふれあいモールの西側に昭和59年に移転新築した映画館。3つの映画館が1か所にという効率的な建物だが、最後までどこがベガでどこがスピカか覚えることができなかった。

○四日市中映(平成16年閉館)

札幌かに本家の裏手に立地。私にとっては忘れられない映画館。高校生時代から用事もないのに下校時にフラフラと寄っていた。詳しくはシネマ游人第4号「四日市に中映があった　バイトをしていた」をご覧あれ。

○四日市中映シネマックス(平成16年7月17日開館・平成19年9月28日閉館)

私がバイトしていた四日市中映の支配人が、四日市シネマホールを引き継ぎ、支配人の目利きで良質な映画を上映していた。

パク・チャヌク監督の復讐3部作の3作目の『親切なクムジャさん』を観に行ったらロビーに、いかにも韓流が好きそうなマダムが3人。この映画の主人公はイ・ヨンエ。当時イ・ヨンエは「宮廷女官チャングムの誓い」で人気であった。そして『親切なクムジャさん』といういかにも耳障りのいいタイトル。完全にこのマダムたちは素敵な韓流ドラマが映画で繰り広げられると思って映画館に足を運んだのでしょうね。ご存じの方は、ご存じのとおり、パク・チャヌク監督の復讐3部作は血みどろ万歳のドロドロ復讐映画である。いかな美人女優イ・ヨンエであろうとも血しぶき浴びまくりですわぁ。あの3人のマダムがどのような顔で映画館をあとにしたか見たかったですわぁ。

○109シネマズ四日市(平成16年11月20日開館)

シネコンですなぁ。座席指定なんてものは昔はなかったが、シネコンは座席指定が当然。ネットで事前に座席を予

約してのんきに入場だぁ。むっ、私の座席に誰か座っているぞ。はっはー、特急電車でよくある、実際の指定者が来たら、その時に席を変わればそれでいいんだろう作戦のお客だなと思い、「あのう、そこは私の席ですよ」と言いながらチケットを見せると、その女性もチケットを取り出して確認だ。「えっ、私、この席ですよ」ってチケットを見せてくれた。なんと同じ席ではないか。そんなことがあるのかぁと思いながらチケットを突き合わせると確かに同じ席である。二人でとトコトコとチケット売り場に行って、同じ席のチケットが発券されてましたよと言って、私の席を変えてもらった。そんなありえないような事がきっかけでその女性と映画の後にお茶をしたという話はなく、なんの発展性もないエピソードでした。

○ロッポニカ四日市(昭和56年11月開館)

現在、四日市市内の映画館は、なんと109シネマズ四日市と、このロッポニカ四日市のみである。飲み屋街を歩いていると突然現れるピンク映画のポスターに衝撃と感動を覚える酔客もいるに違いない。ネットとかで容易にエロ動画を見ることができるこの時代にピンク映画を観に行くお客がいるのだろうか。閉館していないので、いるのだろうね。誰が行くのだろう。一度リサーチしてみたいものだ。

てなことでウィキペディアで調べてみたら、「平成24年時点の観客数は平日が5、6人、休日が約15人である。かつては土曜日夜にオールナイト興行をしており、座席を寝床がわりにするサラリーマンや酔っ払いが多かったという。オールナイト上映時に上質な睡眠ができるように、一部の椅子は向きを変えて設置してある。」とのことであった。なんとも観客に優しいのだ。

今回、四日市って映画館が多かったということを再認識した。昔は映画館にそれぞれ個性というか風情があり、観た映画と映画館とは密接なつながりがあった。今でも、この映画は、あの映画館で観たなぁと思いだすことができるが、現在のシネコンではそのような思い出は難しい。

あのシネコンの3番シアターでこの映画を観たなぁと思い出すことないし。いとさびし。

※映画館の開館日・閉館日は、ネット上での資料を参考にさせていただきました

閑話休題　　Q

■数年前のある日の昼下がり

ルルル～　ルルル～

私「もしもし」

相手「もしもし、健二やけど・・・」

私「声がおかしいなー」

相手「ウン、皆に言われる。風邪引いたんや」

私「そうか・・・」このころから怪しいと思う

相手「あのー、携帯落としてさー、それで・・・」

私「お前、健二と違うやろー。こっちからもう一度電話する」

ガチャンと電話を切る。本人の携帯に電話するも出ず。気になって家に電話する。

私「もしもし、健二風邪引いたん？」

嫁「いえ、元気で今朝出て行きましたよ」

追って本人から「電話なんかしてないよー」とＴＥＬ入る。普段と全然変わらず。やっぱり、振込み詐欺やったんや。これで２度目。高齢者やと思ってナメやがって。まだまだ騙されんぞ！と、まあ、変化のない老夫婦２人に、刺激を与えてもらった一日だったということです。（註・健二は息子の仮名、）

■正月休みに孫娘が来たので、遊び心で、留守番電話のメッセージを次のように変えて録音させてみた。『ただ今留守にしています。ジージは山にシバ刈に、バーバは、川に洗濯に行っています。ピーツと鳴ったらお話ください』これはある新聞からのパクリだが、やってみると、ありきたりのメッセージと違ってナカナカ好評なのだ。オレオレ詐欺の連中も、このメッセージを聴いたらホッコリして止めるかも・・・

■私は古希を迎えて、ワン公を飼いはじめた。元々退職したら・・・と思っていたが、結局それから１０年も経ってからになった。ペットショップで見つけた売れ残りのビーグル犬で、やがて６歳になる。飼うならビーグルと初めから決めていた。あのどことなく哀愁を帯びたというか、とぼけた表情がたまんないのだ。飼い主の私は今、７００世帯ほどの、四日市郊外の団地に住んでいるが、現役時代といえば、家の周りのお隣りさんの名前をそこそこ知っている程度で、ほとんど付き合いはなかった。ところがである、ワン公を飼い始めてから、朝夕の散歩を重ねるうちに、俗にいう犬友がどんどんできてきた。また、近隣の犬の好きな人も高齢になり飼い犬を亡くすると、当方のワン公の周りに集まって来て、何かと面倒を見てくれるようになったのだ。わが家のワン公の外交能力は飼い主の比ではなく、瞬く間に交友範囲が広がっていったのである。現役時代、なんていびつな生活をしていたのだろうと、ワン公に教えられる今日この頃である。雷には滅法弱いが、番犬としても十分その役割を果たしている、当初反対した女房も、想定通り今ではメロメロで、我が家の欠かせない一員になっている。

編集後記

■小誌にいつも寄稿していただいている西松優氏が、この度「ハナ肇を追いかけて」(文芸社)という本を出版されました。ハナ肇として初めての本格的な伝記で、彼がジャズの世界からクレージーキャッツ結成に関わったいきさつ、それに喜劇役者、傍役として活躍した晩年にいたるまで徹底した調査に基づいて書かれています。興味ある方は最寄りの書店へ。(編集部)

■二月十一日朝、久し振りにイオンシネマ東員へ出掛けた。走る路は前方に鈴鹿の峰が連なって見える。異常気象で今年は雪がぐっと少なかった。今朝は7合目辺りまで被っていてやっと冬の藤原岳、竜ヶ岳を展望できた。信州安曇野を思い出す。

大好きな監督ポン・ジュノ『パラサイト　半地下の家族』を観た。１３０分しっかり楽しめる。半地下の家族が幾重にも重なり、ラストに突きつけられた。春からは時間がとれるのでゆっくりと考えたい。　(中村)

■実姉や周りの先輩方が認知症を患い、人格が徐々に壊れていく姿を目の当たりにする機会が増えた。原因が分からないので何とも言えないが、自分は絶対に避けたいと願っている。

趣味で始めたマジックで手先を使う、違うジャンルの方々と日々交流する、たくさんの映画を観る、一日最低1時間の運動をするなど絶えず脳の活性化を意識した生活をしている。これは家族愛にも繋がると思う。高齢になって家族に迷惑をかけたくないのは誰の思いも一緒だ。しかし、自身は今の生活を心からエンジョイしている。来年は古稀を迎える。課題は薬要らずの現在の健康体をいかに継続するかだ　(森)

■昨年も映画館通いの毎日だった。この時期、雑誌や新聞社の映画賞の記事を目にすると、昨年観た映画についてふりかえりたくなる。3～7ページには取り上げられていない作品を紹介したい。

『岬の兄妹』は衝撃的な映画だった。スタッフ、キャスト共に無名だが、難しい問題に臆せず切り込み、一流の映画にした。『おいしい家族』『僕はイエス様が嫌い』も、新人監督ながら素晴らしい出来。

魅力的なヒロインの映画も多かった。浅田美代子主演『エリカ３８』、連ドラで活躍中の戸田恵梨香主演『あの日のオルガン』。コメディ映画の『翔んで埼玉』『ウィーアーリトルゾンビーズ』『今日も嫌がらせ弁当』『生理ちゃん』も、女優さんたちの魅力が炸裂。

『人間失格　太宰治と3人の女たち』は、太宰治、ヴィヨンの妻、斜陽のモデル静子、心中相手富栄が登場する。太宰ファンにはまさに至福の時間。

アニメ映画は全体的にパッとしなかったが、年末近くに公開された3本は良かった。『ルパン三世　ＴＨＥ　ＦＩＲＳＴ』は、３Ｄになってもあのキャラクターたちは最高！外連味たっぷりの演出にやられてしまった。今風の青春ドラマに生まれ変わった『ぼくらの7日間戦争』、新たなカット追加でさらに魅力が増した『この世界のさらにいくつもの片隅に』も素晴らしかった。

さて、洋画は…、っと誌面が尽きてしまいました。第１０号でお会いしましょう。　(村上)